２０１２／０３／１８　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：諦めずに祈り続けなさい
聖書箇所：ルカの福音書　１８章１－８節

讃美歌や聖歌の歌詞を翻訳された皆さんは大変なご苦労をなさったと思います。今、私たちが歌った聖歌の４２３番ですが、この歌詞を書いたエリシャ・ホフマンが何を言いたかったのかを是非皆さんに知っていただきたいのです。残念ながら、今歌った歌詞にはそれがよく記されていません。一番の歌詞はこのようになっています。「私の試練のすべてをイエス様にお話ししなければ、私は自分一人でこれらの重荷を負うことは出来ません。私の悩みの中、主は優しく私を助けてくださる。私を常に愛し、ご自分のものを心配してくださる。私は主にお話ししなければ、私は一人で私の重荷を負うことは出来ない。私は主にお話ししなければ…。イエスが私を助けてくださる。イエスだけが。」と。彼はこのように語ったのです。私たちの信仰そのものです。私たちはいろんなことを経験しますが、私たちの重荷を担ってくださる方がいらっしゃる。私たちはそこにみな持っていけること、すごい恵みだと思いませんか？主は私たちに「一人で頑張りなさい」とは言われなかった。主は私たちに助けを備えてくださっているから、私たちはどんなことでも主の許に持っていける、「あなたの重荷を主に委ねなさい」と言われるのです。それはただの慰めではありません。そこに解決があるからです。すばらしい祝福です。そのことをぜひ皆さんにお伝えしたくて、皆さんにこの歌詞を紹介させていただきました。

今日はローマ書を離れてルカの福音書１８章を見ます。というのは、今月の初めにプロボースト先生が来られて、世の終わりが近いということを聞かされたからです。その話を聞かなくても、私たちは今、どのような時代に住んでいるのか、この時代をある程度読むことが出来ます。私たち信仰者が分かっていることは、確実に今、主がおっしゃった「終わりの時」に来ています。「世の終わり」がもう目の前まで近づいています。そのことを考えたときに、この聖書のみことばが私自身の中に非常な重荷として与えられました。それで今日は皆さんといっしょにこの箇所を学びたいと思うのです。

ルカの福音書１８章をお開きください。ここには不正な裁判官と一人のやもめのたとえ話が記されています。主が弟子たちにこのたとえをお話しになりました。１節からをご覧ください。

「:1 いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。:2 「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。:3 その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいて、私を守ってください。』と言っていた。:4 彼は、しばらくは取り合わないでいたが、後には心ひそかに『私は神を恐れず人を人とも思わないが、:5 どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない。』と言った。」:6 主は言われた。「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。:7 まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。:8 あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」

１節には**「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。」**と記されています。主イエス・キリストは弟子たちに、いつでも祈ることの大切さを教えるためにこのたとえをお話しになったのです。主は弟子たちに、失望しないで祈り続けることの大切さを教えるためにこのたとえをお話しになったのです。いつでも祈るために、失望しないで祈り続けていくために、主はこのたとえをお話しになったと、先ず、みことばは私たちに教えます。今日、私たちは祈り続けることの大切さを学んでいきます。その前に、このたとえを整理してみましょう。このたとえには二人の登場人物がいます。一人は裁判官であり、もう一人はやもめです。この裁判官は２節のみことばが教えるように、**「神を恐れず、人を人とも思わない」**人物でした。つまり、彼は自分のことしか考えない、自分本位の利己主義者であったということです。自分さえ良ければ他人のことなんてどうでも良かったのです。ですから、彼は人のことなどに気を留めることもないし、人の助けになろうなどと考えてもいません。人がどんなに困り苦しんでいようが、不当に扱われていようが、彼には関心のないことでした。そのことは、このやもめに対する彼の態度に現われています。というのは、「やもめ」は守られて尊ばれる存在でした。しかし、この裁判官はやもめに対してもあわれみの心を持っていません。

もう一人の人物はやもめです。彼女は不当な扱いを受けていたと３節に記されています。**『私の相手をさばいて、私を守ってください。』**と彼女は訴えます。彼女は裁判官に正当な裁きを求めるのです。しかし、その願いはむなしく却下されました。間違いなく、このやもめは失意のまま帰宅したはずです。

しかし、このたとえが教えることは、このやもめは諦めてしまうのではなくて、継続して訴え続けたのです。すると、この不正な裁判官は訴えを聞き入れたと、それがこのたとえの内容です。私たちがこのたとえを通してイエスが話されたことを理解するためには、このたとえをお話しになった背景を知っておくことが必要です。イエスはどのようなときにこのたとえをお話しになったのか、実は、このルカの福音書１７章２２節からそのことを見て取れます。**「:22 イエスは弟子たちに言われた。「人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない時が来ます。:23 人々が『こちらだ。』とか、『あちらだ。』とか言っても行ってはなりません。あとを追いかけてはなりません。:24 いなずまが、ひらめいて、天の端から天の端へと輝くように、人の子は、人の子の日には、ちょうどそのようであるからです。:25 しかし、人の子はまず、多くの苦しみを受け、この時代に捨てられなければなりません。:26 人の子の日に起こることは、ちょうど、ノアの日に起こったことと同様です。:27 ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、食べたり、飲んだり、めとったり、とついだりしていたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。:28 また、ロトの時代にあったことと同様です。人々は食べたり、飲んだり、売ったり、買ったり、植えたり、建てたりしていたが、:29 ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。:30 人の子の現われる日にも、全くそのとおりです。:31 その日には、屋上にいる者は家に家財があっても、取り出しに降りてはいけません。同じように、畑にいる者も家に帰ってはいけません。:32 ロトの妻を思い出しなさい。:33 自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。:34 あなたがたに言いますが、その夜、同じ寝台で男がふたり寝ていると、ひとりは取られ、他のひとりは残されます。:35 女がふたりいっしょに臼をひいていると、ひとりは取られ、他のひとりは残されます。」**、イエスはこのことを弟子たちに話されました。そして、今日私たちが見ている１８章１節へと続いていくのです。

主は１７章で何をお話しになっているのでしょう？今、１７：２２から読みましたが、「困難な時代になって行く」という現実があったのです。皆さん、聞いておられて、恐らく、主イエス・キリストがオリーブ山でお話になったマタイ２４章２５章の箇所を思い出されたと思います。確かに、イエスがオリーブ山で弟子たちに話された内容がここに記されています。それは、イエスがこれから十字架に掛かっていくことと、その後、世の終わりまで大変な苦しみが続いていくということです。そのような苦しみを経験する結果、残念なことに、祈りを止めてしまう、祈りに関して消極的になってしまう人たちがいます。そのようなことがないように、主は「いつでも祈るべきであり失望してはならない」ということを教えたかったのです。大変な問題が起これば、大変な困難に遭遇すれば、気持ちが萎えて祈りを忘れてしまうことになる、そこで、主はそのようなことがないようにと弟子たちを励まされるのです。

☆祈り続けることの大切さ

１．主の目的

皆さん、祈りの生活はどうですか？すぐに疎かになりなおざりにされてしまう傾向がありませんか？神との大切な時間が後回しになってしまって、忙しさの中で様々なことで後回しになって、祈らずに一日を過ごしてしまったり、神との個人的な交わりの時間を数日間持たなかったり、恐ろしいことは、それでも一日一日が過ぎていくことです。いつの間にか私たちは、そのような必要性までも考えなくなってしまう可能性があります。

◎祈りの妨げ　：　「祈りの生活」を弱らせる原因

いろいろなことが私たちの内に働いて、私たちから祈りを奪っていこうとします。当然、祈りの妨げというものを考えるときにいくつかのことが出て来ます。

（１）祈りの大切さが分かっていない　：　祈る時間があったら自分で考えて行動する

祈りの大切さがわかっていないとすぐに祈りを忘れてしまう傾向があります。祈っている時間があるなら、もっとやらなければいけないことがあると。

（２）祈りに失望を覚えている　：　神に対する失望かもしれません。「祈っても祈っても答えが与えられない」と。

このルカ１８：１に**「失望してはならない」**と記されているこの「失望」ということばは、失望以外にも「落胆」という意味があります。落ち込まないようにと言うのです。どうして落ち込むのですか？先ほども話したように、祈っても答えられないと私たちは祈りの生活において落ち込んでいきます。また、いろんな問題や困難が起こって来ると、私たちは祈りにおいて落ち込んでしまいます。ですから、主は「これから大変なことが起こって来る。クリスチャンとして主の前に正しく生きていくことが益々困難になっていく。だから、そのような中にあって、あなたが失望し落胆してしまって、祈らなくなってしまうようなことがあってはならない。」と言うのです。「いつでも祈るべきだ。そのためにわたしはたとえを用いて大切なことをあなたがたに教える。」と励ますのです。それがイエスがこの１８章でお話になっているメッセージなのです。ここに、三つのことを見ることができます。

２．主の教え

１）祈り続けることの大切さ

イエスは最初に**「いつでも祈るべきであり、失望してはならない」**と言って祈り続けることの大切さを教えています。ある人はこのようなことばを聞くと、熱心に祈り続けるなら欲しいものが何でも与えられると思います。私たちが祈っているものを手にすることが出来ないのは熱心さに欠けるから、もっと長くもっと熱心に祈り続けたら、神はきっとその祈りに答えてくださると言うのです。しかし、そのようなことをこのみことばは教えているのではありません。なぜなら、このたとえの中でやもめが裁判官に求め続けたことは何だったのか、思い出してください。彼女が求めたことは正当なさばきがなされることでした。不法な扱いを受けている彼女が、裁判官のところに行って「正当なさばきを早く下してください」と訴えたのです。それは間違っていなかったのです。その訴えは正しかったのです。ですから、自分の欲しいものは何でも熱心に祈り続けたら神は答えてくださるというのは、残念ながら、聖書の教えではありません。それは聖書以外の教えです。

このみことばを見て私たちが教えられることは、彼女が裁判官の前で訴えたのは正しいさばきでした。ですから、ここで先ず、主が私たちに教えることは、私たちも同じように正しいさばきがなされることを祈り続けていくということです。正しいさばきが行われることを祈り続けていくとは何のことでしょうか？「正しいさばき」、それが実際に行われるときに、主は人々の悪に対して罪に対してさばきを下されるのです。信仰者の皆さんはそのことをよくご存じです。主はそのことを約束し、そのことを警告されています。主は私たち人間の罪を放っておかれるのではない、必ずその罪にふさわしいさばきを与えるということを警告されています。それはいつのことですか？主が再臨なさる時です。主がこの地上に戻って来られ、ご自分の王国を築かれる時にそのことが起こるのです。ですから、整理するとこういうことです。やもめは正しいさばきがなされるようにと願いました。私たち信仰者は、正しいさばきがなされる日が来ることを知っているのです。主が再臨された時です。ですから、言い方を変えれば、この願い、この祈りは「主の再臨を待望する祈り」です。「主が早く帰って来て欲しい」と、そのことを求める祈りです。なぜならその時に、神の敵として、主を愛する者たちに迫害をもたらした者たちに対するさばきがなされるからです。だから、そのことを覚えている人たちは、人の悪に対して自分で復讐しようとはしないのです。

実はここで、８節に記されている**「正しいさばき」**ということばはローマ書１２章１９節では「復讐」と訳されることばです。**「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」**と書かれいます。主ご自身も実はそのようにして歩まれました。Ｉペテロ２：２３に**「ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。」**と記されています。正しくさばかれる方、正しい審判者に主はすべてをゆだねたと言うのです。必ず、その方による正しいさばきがなされる日がやって来るのです。すべての世の罪が、主に逆らった者たちが、主の前でそのすべての罪を主によってさばかれる日がやって来るのです。確かに、それは恐ろしい日です。

◎「罪のさばき」

マタイの福音書１６：２７に**「人の子は父の栄光を帯びて、御使いたちとともに、やがて来ようとしているのです。その時には、おのおのその行ないに応じて報いをします。」**とあります。主が再臨される時に、**「おのおのその行ないに応じて報いをします。」**と。もちろん、私たち信仰者は主イエス・キリストにお会いする時に、その信仰に応じて神からすばらしい祝福、褒美をいただきます。しかし、この主に逆らい続けて来た者たちに対して神はこのような警告を与えています。**「その行ないに応じて報いをします。」**と、大変厳しいさばきです。Ⅱテサロニケ１：６からもパウロはそのことを教えています。**「つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、:7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現われるときに起こります。」**と再臨のときのことです。８節には**「そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。」**とあり、神に逆らい続けて来た者たちに対する神の正しい、そして、厳しいさばきが約束されています。主が再臨されるときにそのようなことが約束されています。

やもめは正当なさばきを求め続けました。私たち信仰者も同じように、正当なさばきの時が早く訪れるように祈り続けていく、そのことがこの１８章の中で最初に主が教えておられることです。一つ目は、私たちは主の再臨の日が早く訪れることを祈り求め続けてゆくということです。そのことはまた、最後に見ます。必ず、その日は来ます。そして、今私たちはその兆候を見ています。確実に、私たちはその

日へと向かっています。その日が近いことを我々は確信するのです。

２）主を信頼して祈り続けることの大切さ

主がこのたとえを通して私たちに何を教えようとしているのか？二つ目は「主を信頼して祈り続けることの大切さ」です。「失望してはいけない」と言うのです。最初にも話したように、多くの皆さんは「もう祈ることに疲れた、だって、祈っても祈っても答えがないから」と言います。特に、８節のみことばを見ると**「あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。」**と、このような約束を与えてくださっています。**「すみやかに」**神がその悪をさばいてくださって、そして、私たちをご自分の許に召してくださると、そのように約束されているのになぜ、まだそれが起こらないのでしょう？皆さんもよくご存じのように、パウロは自分が生きている間に主の再臨があると思っていました。自分が主の許に召され、そして、主のさばきが下ることを彼は確信していました。しかし残念ながら、それは起こりませんでした。それからもう二千年近く経ちました。当然、私たちの中でも「いったい、あの約束はどうなってしまったのだろう」と思う人がいるでしょう。主は**「すみやかに彼らのために正しいさばき」**を成すと言われました。**「すみやかに」**ではないかと…。なぜでしょう？二つの理由があります。

（１）主の忍耐

主のあわれみです。Ⅱペテロ３：９でペテロが言うように**「主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」**、神は約束を取り消されたのではないのです。神の正しいさばきをもって世の罪をさばくというこの約束が反故にされたのではないのです。約束は必ず成就するのです。しかし、主はあわれみ深いお方であり、ご自分の忍耐をもって、ひとりでも多くの罪人がこの救いに至るようにとその機会を与えておられるのです。みことばはそのように私たちに教えてくれます。だから、皆さんに心から勧めなければいけないのです。それは、もしあなたが今もあなたを造りあなたを生かし、そして、あなたが背きあなたが逆い、敵として歩んで来た創造主である真の神にいつまで背を向け続けるのかということです。この方に対していつまで逆らい続けるのかです。この神に対していつまで罪を犯し続けるのかです。その罪を悔い改めて、主があなたのために備えてくださった罪の赦しを心からいただくことです。

神はあなたのためにすばらしい救いを備えてくださった。イエス・キリストを地上に送り、イエス・キリストを十字架で殺し、イエス・キリストを死からよみがえらせることによって、完全な救いを備えてくださった。それなのに、どうしてあなたはその救いを拒み続け、そのすばらしい主に背を向け続けるのかです。罪を悔い改めて、この救いを求めて出て来ることです。逆らい続けることを今すぐ止めることです。主は忍耐をもって、あなたのために救いを備え、あなたを待っておられると言うのです。

なぜ、あなたは出て行かないのですか？なぜ、あなたはこの救いを求めて主の前に出て行かないのですか？皆さん、多くのクリスチャンはひょっとしたらそのように思い込んでいるだけかもしれません。それだけの聖書の知識があります。でも、問題はあなたが個人的にあなたの創造主なる神と、救い主イエス・キリストと個人的な関係があるかどうかです。その方があなたにとって最も大切な存在であるかどうかです。その方に喜んで従っていこうという、心の中にそのような強い思いがあるかどうかです。この神の栄光のために生きていきたいという、そういう思いがあるかどうかです。この神だけを愛してこの方が喜ばれることをして行きたい、そういう思いがあなたのうちにあるかどうかです。どんなに知識があっても個人的関係がなければ、あなたのうちにいのちはありません。いのちがなければあなたの生活に変化は訪れません。主の前に救いを求めて出て来ることです。このすばらしい主が備えてくださった救いをご自分のものとしてしっかりとお受けになることです。救われることです。永遠のいのちをいただくこと、罪の赦しをいただくことです。主は忍耐をもって待っておられます。だから、まだ、そのさばきの日をこの世にもたらしていないのです。

（２）主の訓練

あなたの成長のために、主は様々なことをあなたの人生にもたらしているのです。そうです。あなたが経験している大変な苦しみも、悲しみも、痛みも、ときに、私たちは内蔵が引き裂かれるのではないかと感じるほどの痛みを覚えることがあります。希望が見えなくなる時があります。しかし、私たちが分かっていることは、そのすべてのことは私たちの成長のためだと。私たちも思います。こんな苦いものを、こんなにおいしくないものをなぜ、親は私たちに提供するのかと。自分のためだったと後で分かるのです。私たちの生活に起こるすべてのことに関しても同じことが言えます。確かに、私たちはその中にあって、光が見えなくなって「神さま、どうしてですか？」と言うことがあったとしても、我々は

学んで来たのです。神の為されることは常に最善であるとそのレッスンをしっかり学んだ者は、神によっての成長を見ることが出来ると。

１８章７節を見てください。**「まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のために…」**とあります。これがクリスチャンなのです。これがクリスチャンの特徴なのです。なぜ、夜昼神を呼び求めているのか？この人は自分の弱さを知っているのです。弱さを知っているから、いつも神に助けをもらわなければいけないのです。私たちの希望は主にあるのです。私たち自身にあるのではありません。私たちはこのような信仰者になりたいものです。どんなときにでも私たちは神の助けを覚えて、その助けをいただきながら歩んでいこうとします。詩篇の著者はこのように言っています。「神によって私たちは力ある働きをします。」と。すばらしいことだと思いませんか？すばらしい事実だと思いませんか？旧約の人もそういう告白をするのです。ダビデが神の力によって働くことが出来ると言います。この**「夜昼神を呼び求めている」**人は、まさにそのことを知っている人です。自分のうちに力がないことを知っているのです。自分がいかに弱くて、自分がいかに罪深いかを知っているのです。神の命令に対して自分にはそれを実践する力がないことを知っているのです。神を喜ばせることが私には出来ないことを知っているのです。

だから、それを可能にしてくださる神に助けを求めるのです。それが信仰生活の土台です。私たちの力は私たちにあるのではない、主にあるのです。その力をいただきながら我々は生きていくのです。この人物は夜昼主を求めているのです。主の助けが必要だから、そのことを知っているから…。私たちはそのような信仰者になりたいものです。絶えず祈らなければいけないのではないのです。絶えず祈らなければやっていけないのです。いつも祈って神の助けをもらい、神の知恵をもらわなければ神に喜ばれることなどできないのです。そのために、皆さん、私たちはいかに神の前に砕かれることが必要かです。邪魔をするのはプライドです。「私はできる」と思わせるその罪です。もし、人間の中で最も誇ることができるとするならパウロです。そのパウロが言ったことは**「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」**（ピリピ４：１３）です。力は主にあることを知っているのです。それが強い人なのです。主は「様々な困難を経験する」と警告されましたが、実は、それらも私たちのためなのです。

◎試練に耐える人

自分の力や知恵で生きようとしている人は神の前に愚か者です。主は私たちに様々な訓練を与えてくださる。私たちはその訓練によって変えられていくのです。ヤコブ書１章１２節にヤコブのメッセージがあります。**「試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。」**と、**「試練に耐える人」**ということばがあります。これはどのような人ですか？どのような試練にあってもこの人は、これは自分の信仰を成長させるため、自分がより主に似た者へと変えられていくために、敢えて主が与えてくださったのだというその目的を覚えて、また、主の約束を信じて、なおも忠実に歩み続けていく人です。そのような人をヤコブはここに記したのです。大変なことがたくさん出て来ます。その中にあってこの人は、なぜ、主がこのような困難を自分に与えているのか、その目的を覚えたのです。これは私の訓練のためであり、これは私が成長するために必要だとして主が備えてくださったもの、だから、彼はその中で「主が喜ばれる正しいことを行ない続けてゆこう。」とそのように決心してそのように生きたのです。だから、祝されたのです。主に喜ばれたのです。

◎耐え抜いて良しと認められた人

「耐え抜いて良しと認められた人」と訳されています。**「認められた人」**とは一般に「証明された、試験済みの」という意味で、つまり、そのように生きている人です。どのような時でも主の前に自分に与えられている責任に対して正しいことをして行く、そのように生きている人です。その人は主によって認められた人なのです。

◎神を愛する者に約束されたいのちの冠

そして、その後**「神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。」**とあります。この「冠」とは、ヘブル語聖書のギリシャ語訳である７０人訳では「特別な名誉」とし、幸せや繁栄の象徴として、また、王様の冠としてこのことばは使われるのです。朽ちることのない主からのすばらしい祝福のことです。それがこの**「いのちの冠」**だと言うのです。**「いのちの冠」**とは「いのちである冠」です。つまり、約束されている冠とは「永遠のいのち」のことです。つまり、ヤコブがここで言ったことは、どんな時でもどんな困難があっても、主に喜ばれることが何なのかを考えて生きている人、その人は認められた人である、その人には永遠のいのちが約束されているということです。

このような説明をするとある人は「では、そのような試練の中で正しい歩みをしたから、その行ないが永遠のいのちをもたらすと、そのようにヤコブが教えているのか？」と言いますが、そのようなこと

を言ってはいません。確かに、ヤコブが私たちに言ったように**「試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。」**、正しい生き方をするならいのちの冠を受けると、そのように言われているかのように思いますが、ヤコブはそのようには教えていないのです。ヤコブが教えているのは、この「永遠のいのち」、「いのちである冠」、これは神を愛する者たちに約束されたものだということです。神を愛する者に約束されたのが「永遠のいのち」だと言うのです。

まとめます。ヤコブが言いたいことは、大変な試練があってもいろんな困難があっても、問題があったとしても、その中で主を信頼して主に従っていこう、主が喜ばれることを為していこうと、そのように歩む人は救われている人ということです。そのような生き方こそがその人が救われていること、主を愛していることの証明だと、そのことをヤコブが言ったのです。だから、神を愛する者に永遠のいのちが与えられると言うのです。神を愛する者たちとは救われている者たちです。救われている者たちは、神を愛するがゆえにどんな試練の中にあっても神が喜ばれることをして行こうとするのです。ヤコブが言いたいことはそういうことです。行ないによって救われるということではありません。救われた者たちはその行ないが救われていることを証明すると言ったのです。神を愛する者たちにはすばらしい「永遠のいのち」という冠が与えられる、そのようなすばらしい祝福が与えられる、それは良い行ないのゆえではなく、神を愛する者へと生まれ変わったからです。救いに与ったからです。

ですから、ペテロはこのように言います。Ｉペテロ１：８**「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。」**と、これが救われている人たちの特徴です。パウロはＩコリント８：３で**「しかし、人が神を愛するなら、その人は神に知られているのです。」**と言っています。神を愛する者、それは神によって救われた者たちなのです。だから、その人たちに永遠のいのちが約束されたのです。そして、神を愛するゆえに、救われているゆえに、失敗はします、疑う気持ちが出て来ることもありますが、そのような中でも神が喜ばれることを選んでいこうという思いをもって生きていこうとするのです。そのように生きる人たちは神を愛する者であることの証拠であり、永遠のいのちをいただいた者の証拠であると、ヤコブはそのように言ったのです。

このルカの福音書１８章で主が私たちに教えてくださること、それは主イエス・キリストの再臨を待望しながら、その日が早く訪れることを祈り続けていきなさい、どんな時でもあなたは主に信頼を置いて祈り続けていきなさいということです。確かに、あなたの思うように物事は進まないかもしれないけれど、神はご自分で何をされているのか分かっているのです。この方はあなたにとって何が最善かを知っているのです。私たちが学ばなければいけないのは「私の思いが成りますように」ではなくて、「主のみこころが成りますように」と祈ることです。なぜなら、主だけが最善を知っておられる方だからです。私たちはそのように祈っていくのです。だから、どんな時でも私たちは主を信頼して、主の約束に立って祈っていくことです。そのことを私たちは二つ目に見ました。

３）主の恵みを覚えて祈り続けることの大切さ

私たちが祈り続けていくときに、いつも主の恵みを覚えていなさいということです。なぜなら、この不正な裁判官は人のことを何とも思っていませんでした。しかし、正しい裁判官である主はあなたのことを大切に思っておられます。ですから、見てください。あなたは「選民」と記されています。７節**「夜昼神を呼び求めている選民のために」**と、それがあなたです。信仰者の皆さん、すばらしい約束です。主があなたを救いへと招いてくださったのです。主のみこころによってあなたは選ばれたのです。エレミヤがこのように言います。エレミヤ３１：３**「主は遠くから、私に現われた。「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した。それゆえ、わたしはあなたに、誠実を尽くし続けた。」**、あなたは永遠の昔から創造主である真の神によって愛されたのです。

主はこのように言われました。ヨハネ１５：１６ａ**「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。」**と、確かに、私たちはイエスを信じるという決心をし告白しました。でも、みことばが教えていることは、主が働いてくださったから、あなたはそのような決心をすることが出来たということです。すごいことです。主が一方的に私たちのうちに働いてこの救いへと招いてくださったのです。私たちは神のことも神の救いのことも、自分の罪深さも分かっていなかった、分かり得なかったのです。でも、神が私たちのうちに働くことによってそれを理解し、救いが必要であることが分かり、何と、神は私たちを導いて悔い改めへと、そして、この救いを受け入れるようにと働いてくださったのです。だから、救いは恵みなのです。一方的に神が私たちにくださったものなのです。

私たちは主が早く帰って来てくださることを祈り続けること、その大切さを教えられました。それがどんなに時間のかかることであったとしても、必ず、そのことが起こるということを知って、信じて、主に信頼を置いて祈り続けていくのです。私たちがその主の前に、その主の再臨を祈り続けていくときに私たちが覚えなければいけないことは、私たちが祈っている神はどんなにすばらしいお方かということ、私たちはどれ程すばらしい神に祈ることができるのかということです。主は不正な裁判官ではないのです。私たちは、私たちを愛して私たちを救ってくださった偉大な主の前に祈ることが出来るのです。

結論

最後のまとめです。８節の後半に**「…しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」**とあります。再臨のことです。この「信仰」とは救いのことではありません。主がここで言われているのは、このやもめのような信仰者のことです。このやもめは不正な扱いを受けていても、大変な苦しみ問題があっても、正しい裁判がなされるようにと、それを求め続けたのです。どれだけ否定されてもそれを求め続けたのです。主が言われているのはそのような信仰者のことです。「祈っても祈っても主の再臨はまだ訪れない！」、だからと言って失望するのではないのです。大変な苦しみが増して来て、大変な摩擦が増して来て、どんどん辛くなったから止めてしまおうでなくて、それでも「主よ、早くお帰りください！」とそのように祈り続けていく、そのことです。

だから、主はここで主が再臨された時に、その現われを祈りながら待ち焦がれていた人がどれだけいるだろうかと言ったのです。もう一つ言うと、「わたしが戻って来た時に『主よ、私はあなたが帰って来られるときを待っていました。私はあなたがお帰りになるその時を待って、そのために祈っていました。』と言う、そのような信仰者として歩んで行きなさい。」と、それが主が私たちに望んでおられることです。

なぜ、主はそのことを望んでおられるのでしょう？ヨハネが教えています。Ｉヨハネ３：２，３**「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。」**、イエスにお会いしたときのことです。そして、３節**「キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。」**、イエスは今日帰って来られるかもしれないと思っている人は、今日をどのように生きるのかということに最善の注意を払います。例えば、だれかが皆さんの家を今日訪問するとして、その人が玄関口で話をするのではなくて、リビングまで入って来て、リビングの隅々まで見るような人ならどうしますか？玄関だけでなくリビングまできれいにしようとしませんか？

私の大学時代、木曜日の朝はホワイトグラブインスペクションというのがありました。自分たちの家の責任者が白い手袋をはめてそれぞれの部屋を回って、ベッドから机などをその手袋で触って、汚いところがあると掃除のやり直しです。私たちは水曜日の晩に徹底的にきれいにするのです。明日、やって来るから今日中にきれいにしておこうと。もし、イエスが今日私たちのところに帰って来られるとしたらどうでしょう？私たちはその備えが出来ているかどうかです。もし、その備えが出来ているなら、その人は確実に今日、神の栄光のために生きている人です。神が喜ばれることを考えてそれを選択し、いつ主にお会いしてもいいように、十分な備えをもって今日生きているからです。そのような人でありなさいと言うのです。

主がお帰りになるのはまだ先のことだと思っているなら、私たちは備えをしません。今日、その日が来るかもしれないから、今日、イエスにお会いするその備えをして生きなさいと言います。なぜなら、そのような決心をして生きている人は、確実に主の前に正しく生きている人であり、主に喜ばれることを選択している人であり、そして、主の栄光を現わしながら生きている人だからです。そういう人になりなさい！と。どうぞ、そのような人になってください。信仰者の皆さん、地上での生活はあっという間に終わります。どのように皆さんはゴールを迎えますか？何となく日々を過ごして、朝、目覚めても感謝がなくて、何となくその日を過ごしてしまう、そんな無駄な人生は止めようではないですか！今日イエスにお会いするその備えをして今日生きることです。明日かもしれない、明日お会いする備えをもって新しい日を迎えることです。祈りつつその備えを為すことです。それが主が私たちに教えてくださる主が喜ばれる生き方です。そのような歩みをもって、あなたのすばらしい主を証してください！そんな信仰者が今必要なのです。そのように生きる信仰者がこの世の終わりに必要なのです。そんな信仰者としてあなたが歩んでくださることを願います。そのことを信じて祈ります。

《考えましょう》

１．再臨を待望しながら日々過ごすことがどうして大切なのでしょう？

２．主がまだ再臨なさらないのはどうしてでしょう？

３．主が再臨なさるとどのようなことが起こるのでしょう？